

刊 行 の 辞

1200年の歴史を有する四国遍路は、今もなお多くの人々を四国へ誘い、地域の人々もお接待で迎える、生きた四国の文化です。

本センターは、四国遍路の歴史や現代の実態を解明し、世界各地の巡礼との国際比較研究を行うことを目的として、2015年法文学部附属として設立され、2019年には社会連携推進機構（現・地域協働推進機構）のもとで全学センターとなりました。地域との連携をいっそう深めるために、2020年1月には、四国4県を中心とする四国遍路世界遺産登録推進協議会の「普遍的価値の証明」部会と協力協定を結んでいます。同年4月からは、科学研究費基盤研究（B）「霊場資料学の構築と霊場文化の解明による四国遍路の総合的研究」（研究代表者：胡光）を獲得し、学内外の研究者とともに研究を継続しています。

本年度の調査では、コロナ流行前から行っている小松島地藏寺の調査を再開し、善通寺文書や阿波国分寺の調査も継続しました。地域共創研究センター、俳句・書文化研究センターと共同開催した「地域文化の研究・活用の可能性と課題を考える」、協力協定を結ぶ世界遺産登録推進協議会と共同開催した「四国遍路の普遍的価値を考える」、今治市と共同開催した「写し霊場と地域社会」という三つのシンポジウムに加え、熊本大学永青文庫と共同で研究会を開催するなど、科研最終年度にあたり研究成果公開の場を多数設けました。

昨年7月、「佐渡島の金山」の世界文化遺産登録が決定したことを受け、長く佐渡島の調査を行っている立教大学教授・門田岳久氏を招いて、10月26日に「四国遍路の普遍的価値を考える」シンポジウムを開催しました。同氏は「普遍的価値」には、遺産全体の歴史、フルストーリーが必要であると言います。佐渡は、「普遍的価値」と考えた近世伝統的手工業だけでなく、徴用工の歴史を博物館で展示することで、反対する韓国と合意し、世界遺産となりました。四国遍路では、「ヘンド」と呼ばれる人々やハンセン病患者についても考える必要があるとされ、フルストーリーを表現する博物館の役割も強調されました。

愛媛大学特定准教授・大本敬久氏は、四国遍路の暫定一覧表記載候補提案書を引用し、あらゆる人々を救済する場所である四国の特殊性について紹介した後、具体的な史料を示しながら、ハンセン病患者の遍路の実態を明らかにして、亡くなった遍路の墓を守り続ける四国の「生きた伝統」についても紹介しました。

愛媛大学准教授・中川未来氏は、これまで触れられていない朝鮮や台湾など植民地の写し霊場「新四国」を紹介し、人の移動による聖地の移植について明らかにしました。地域振興や移民の健康祈願、定住化に利用された歴史は、四国遍路史や植民地史にとって重要な指摘で、多角的に研究する必要性を感じました。

これらの講演・報告をふまえたシンポジウムでは、鳴門教育大学名誉教授・大石雅章氏が、江戸時代に飢饉になると、西国巡礼は減少するのに四国遍路は増えることを紹介して、飢えた人もハンセン病患者も「生きる」ために四国を訪れると発言されました。これまで、職業遍路と呼ばれる人々は、死に場所を探して四国を回り続けるとされてきました。「生きる」ために遍路をし、接待で支える四国の文化は、救済の場所・四国の価値を表しています。

世界遺産になるよう政府に推薦されるためには、まず「暫定リスト（暫定一覧表）」に記載され、ユネスコに提出される必要があります。この中から、資産の文化財指定、顕著な普遍的価値の証明などの準備が整ったものを、世界遺産委員会へ推薦し、約1年半の審議を経て世界遺産が誕生します。4月23日に行われた文化庁文化審議会で、「暫定リスト」を検討する世界文化遺産部会ワーキンググループが設置される、新たな動きがありました。「暫定リスト」入りするためにも「普遍的価値」の研究は、重要になってきています。

センターでは、様々な分野の研究者を集め、多角的に四国遍路の価値を研究しており、その成果を広く知っていただくため、新たな新書『四国遍路と世界の巡礼—最新研究にふれる八十八話（下）』も制作していますので、さらに四国の文化に親しんでいただければ幸いです。

末筆ながら、今後とも本センターへの御支援・御協力をお願いいたします。

愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センター長 胡 光